

《書評》

今井康雄『メディアの教育学——「教育」の再定義のために』

村 上 博 文

はじめに

本書は、1987年から2003年の間に、メディアという概念を軸に教育を捉え直すという意図のもと、今井氏によって書かれた諸論文を1冊にまとめたものである。その点では今井氏の前著、『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想—メディアのなかの教育』（世織書房、1998）の延長上に本書がある。しかし前書と本書とのあいだには、氏の研究姿勢および研究対象に大きな違いがある。「謝辞」で今井氏自らが述べているように、以前はドイツの教育思想を自分の守備範囲と定め、現代日本の教育を対象にすることなど考えもしなかった。したがって現代の日本における教育は、今井氏にとって近くにありながらずいぶん「遠い対象」にすぎなかった。それに対して本書は、現代日本の教育について今井氏自らが積極的に語ったものである。その意味で本書は、日本の教育界への今井氏のデビュー作である。

1. 本書の内容

まず、本書の目的から述べていくことにしよう。タイトルをみればわかるように、本書は教育をメディアという視点から再定義することを目的としている。その際に重要なのは、このタイトルには、2つの意味が含まれているということである。1つは、メディアを教育的に分析することであり、またもう1つは、メディア自体が持つ「教育学」、すなわち教育を条件づけたり構成したりする仕組みを解明することである。より厳密に言うならば、前者の試みを前提に、教育を可能にしている背景や条件を明らかにするというのが、本書の意図である。

今井氏が上述したような課題をもつにいたったのには、2つの理由がある。1つは、メディアを教育的に分析するという試みと関連するが、教育学におけるメディア認識が「表面的」かつ「異物的」な

ものにとどまっているという実状である。「表面的」とは、コメニウスの『世界図絵』に代表されるように、メディアの世界を子どもたちにとって肯定的なものとしてとらえることである。また反対にプラトンにおける「洞窟の比喩」が意味するように、メディアの世界を子どもたちにとってマイナスのイメージで理解することでもある。その流れは現在、「メディア利用」と「メディア批判」というかたちで受け継がれている。それに対して「異物的」とは、メディアが教育の外側からやってきて教育を攪乱するものであるという理解である。このようなメディア認識にとどまる教育学の現状を見据えて、今井氏はそれを超えるようなメディアに対する深い理解が必要であると主張する。

またもう1つの理由は、メディア自体がもつ「教育学」を解明するという試みに関係している。1970年代以降、教育における諸問題が次々と出てくるたびに、教育学は回顧主義的な主張を繰り返してきた。それによって現代の教育において生じている諸問題の原因が、実はそれ自体のなかに潜んでいるという事実気づくことができないという事態に陥っている。それゆえに、そのメカニズムを解明することこそ、教育研究の課題として重要であると今井氏は述べている。

それでは自らの目的を実現するために、今井氏はどのように論を展開していくのだろうか。本書の構成にしたがい、その内容をみていくことにしよう。1部では、教育の自明性の喪失という事態に目を向けるに先立ち、改めて教育の考察にメディアを導入することの可能性について論じている。今井氏によれば、「教育的メディア分析」とは、メディアがいかに教育の領域を条件づけているか、またいかに教育の可能性を条件づけているかを明らかにすることである。言いかえるならば、メディアによって間接性の空間が開かれるが、その空間は必然的にメディアによって規定されたメカニズムを内蔵することに

なる。このメカニズムを解明することが、「教育学的メディア分析」であると、今井氏は述べている。またメディアのメカニズムを解明するとは、教育する側の意図がいかに屈折しているか、反対に教育される側の「自由」がいかに挑発されているかを明らかにすることであると説明を加えている。そのうえで「教育」を、教育する側の意図によって選択され構成されるメディアのなかで、教育する側の意図と教育される側の自由が「すれちがう」過程である。またメディアに支えられることによって、また支えられる程度に応じて水面に顔を出す氷山の一角が「教育」なのであると、今井氏は述べる。

そしてII部において、「戦後教育学」をこえて一現代教育の風景」というタイトルがつけられていることからわかるように、教育の内部において生じている教育の自明性の喪失という事態を内部観察し、それを記述する。ちなみに教育における自明性の喪失には、それまで通用してきた教育学の枠組みが機能不全を起しているという事態（教育学レベル）と、従来の枠組みでは手に負えない様々な教育現象が出現しているという状況（教育レベル）がある。その両面から今井氏は、教育を可能にしていた条件（メディア）を明らかにしている。

教育学レベルとして今井氏が挙げているのは、日本の戦後教育学が主要課題としてきた「公共性」をめぐる議論（1章）と、日本の教育学における「ポストモダン」に関する議論（3章）である。今井氏によれば、日本の教育学において「ポストモダン」の議論が始まったのは、1988年である。その後、1990年代になると、外国の教育学における「ポストモダン」の議論（ドイツやアメリカ合衆国）が、日本でも紹介されるようになる。そして1990年代半ばには、「ポストモダン」という用語は、時代を診断するための現状確認のためのものとして日常化していく。しかし「ポストモダン」の概念は、教育問題を近代教育のシステムにおける機能不全として分析することはできたが（子どもの権利、人間形成論、公共性）、新しい教育学を構想するには至らなかったと、今井氏は批判する。そのなかで人間形成論という点から「ポストモダン」を超える可能性をもつ研究として、今井氏は矢野智司氏の『ソクラテスのダブル・バインドー意味生成の教育人間学』（世織書房、1996）と西平直氏の『魂のライフサイクルーユング・ウィルバー・シュタイナー』（東京大学出版会、1997）を紹

介している。今井氏によれば、矢野氏は古典的人間形成論とはまったく異なる論理で、また西平氏は古典的人間形成論を超える視点を含んでいるという点で、「ポストモダン」を超える可能性をもっている。

いずれにしろその状況をもっとも象徴しているのが、教育の「公共性」をめぐる議論である。それは公教育を決定づける権限は誰にあるのか、経済的・権力政治介入に対して、教育活動のための自由空間をいかに理論的に保証するかという「教育と政治」に関する問題である。これまで教育の「公共性」を支える理論的支えになっていたのが、堀尾輝久氏の「私事の組織化としての公共性」という近代ヨーロッパを規範にした考え方である。そしてその教育学的公共性論を支えていたのは、「子どもの学習権」の保証であり、その根拠になっていたのが子どもの「発達」という考え方であった。

教育における公共性を理論的に支えるという堀尾氏の試みが、今井氏は今まさに挫折していると批判する。その理由として、政治だけでなく教育活動にもまた権力関係が潜在していること、私的な利害と国家的・経済的利害の共棲、個人の発達に対する信頼性の喪失の3点をあげている。そしてそれが明らかになった背景には、心性史・社会史的方法、フォーコーの権力論やポストモダン論議、さらに京都大学における教育人間学の伝統があると、今井氏は分析している。

また教育レベルとして、すなわち従来の枠組みでは捉えきれない教育現象として、今井氏は現代学校における美学化（2章）と教育実践の不透明性（4章）を指摘している。紙面の関係上、ここでは前者についてだけふれておく。今井氏によれば「新しい学力観」をめぐる議論の背景には、従来とは異なる認識論的構造がある。敗戦から1970年前後までは、〈生活と科学〉という図式で学校について議論されてきた。その図式とは異なるものが、1970年代以降、生活の美学化という新しい傾向のなかで生まれてきたのである。それは〈美とメディア〉という図式である。すなわち構成主義的な知識観によって美的な体験と情報活用能力が直に結ばれ、そしてこの両者が「新しい学力観」を支えるという構図になっているのである。しかし今井氏は、それを逆転の発想で、美的に味われた体験の真正性をメディアの操作によって得られる情報や体験が問題化し、逆にメディアの操作の自明性を美的体験が問題化するという、ネガ

ティブな結合にポジティブな可能性を見ようとしている。

こうして教育の自明性の喪失という事態を内部観察したところで、III部ではそれに大きく寄与したと考えられる「ポストモダン」の諸議論（フーコー、ルーマン、ハーバーマス）に目を向けていく。その作業は、今井氏にとって内部観察する自らの立脚点を確かめるという意味もある。それについて述べる前に今井氏は、教育学批判を2つに分類している（5章）。1つは、従来の教育学的反省による教育現実の批判、すなわち「教育学的教育批判」である。またもう1つは、近年見られる教育学批判のタイプであり、それは近代教育学のいう「教育」に対抗するポジティブなモデルを立てるもの（アリエス、モレンハウアー）と、教育現実に照らして教育学的反省の限界を策定する「教育学的理性批判」（フーコー、再生産理論、システム論など）に分けられる。そのように分類したうえで今井氏は、近年の教育研究は「教育学的理性批判」タイプの研究が隆盛していると分析し、それは自らの立論の根拠になっている対抗モデルを批判的反省の対象に組み込むことによって、はじめて現実を変えるモデルになるのではないかと指摘している。

そのように整理したところで今井氏は、ルーマン、ハーバーマス、フーコーの考え方に対して批判を加え、自らの立場をより鮮明していく（7章、エピローグ）。ルーマンに対しては、メディアが教育を可能にする装置としてとらえられているけれども、その不透明性が最初から除外されていると、今井氏は述べる。またハーバーマスについては、教育は「合意」を可能とする「理想的対話状況」を前提とすることはできず、したがって「合意」を前提にした教育では「すれちがい」が生じてしまうと指摘する。さらにフーコーにいたっては、教育が他者を操作対象としてしかみなない権力関係に還元されてしまうと批判する。そのうえで今井氏は、教育を知識や権限を非対称に分配された者同士が合意（真理性、正当性、誠実性）を目指して行うコミュニケーションとして捉える視座をもたらすという点で、ハーバーマスのコミュニケーション論に「教育学的可能性」を見いだそうとしている。

そしてIV部では、これまでの作業をふまえて、今井氏自らメディアの「教育学」を取り出す試みを行っている。例えば戦後の国語教育をめぐる西尾・時枝

論争には、私に対する自己の透明性と私に対する「思想的内容」の透明性とが同時に可能になるような「国語観」、すなわちメディアとしての「国語」が存在することを明らかにしている。またオウム教団の事件は、型や修業の伝統的な構想を支える基盤が、生活の美学化のなかで失われてしまった結果、自己を人工的に構成可能にする型を再建しようとする試みがグロテスクなかたちで現れたものである（11章）。さらに子どもの美的経験（のサイクル）において、作品を経由することは、子ども自身が考えもしなかったような、今までとは異なる自己を作り出す機会をもたらす。より正確にいうならば、様式化された知覚や感情を子どもの側に沈殿させると同時に、思いがけぬ自己へと変換する可能性を子どもに提供するのが、メディアとしての作品の働きであると今井氏は主張する（12章）。そのうえで今井氏は、ハーバーマスにならって、教育とは合意を目指したコミュニケーションの過程であると理解し、合意のプロセスにおいて必然的に生じるであろう「すれちがい」を意味あるようなかたちで適切にコントロールするのがメディアのメカニズムであると述べている。そしてそのメカニズムをいかに構築していくかが教育の問題であると、今井氏は指摘する。しかしエピローグで述べているように、メディアのメカニズムがいかに構築されていくかについては現時点ではわからず、それは今後の課題とされている。

2. 本書を読んで

以上のように理解したところで、以下では本書に対する感想やコメントを述べていきたい。

まずこの書を読んで、今井氏が目的としていた「メディアの教育学」という図柄を思い浮かべることができたどうか、一読者としてその問いに答えたい。YesかNoかで答えるならば、Yesだろう。しかし正直のところ、一度通読した段階では、十分にその全体像をつかむことはできなかった。というよりも、全体像どころか各章について理解することもままならなかったというのが率直な感想である。ところが何度も読み返しているうちに、おぼろげながらメディアの教育学という構想が見えてきたというのが本音である。

その際にふと思い出したのが、M.マクルーハンの『グーテンベルグの銀河系—活字人間の形成』（みす

ず書房、1986)を読んだときの体験であった。そのときもまた、はじめは何を書いてあるのか理解するのが難しかった。その理由は、活字メディア批判という文脈のもと、彼は意図的に文章を論理的に展開していくことを避けたからであった。しかし最後まで読み終えると、1つ1つの星が集まり、その結果として銀河系が描き出されるのであった。そうした展開を今井氏がはっきりと自覚していたのかどうかはわからないが、本書を読んで同様の体験をすることができた。しかし浮かび上がってきた、メディアの教育学という今井氏の意図するものに何か違和感をもつのもまた否定できない。それはいったい、どうしてなのだろうか。

また本書を通じて一貫して採用されている、内部観察という方法にも興味をそそられた。内部観察とは、近年、カオスやフラクタルといった複雑系の領域で注目を浴びている考え方である。それは、あるシステムに自らも参加しており、その行動が全体にも影響を及ぼすように動いているシステムの中において、システムを観察し、未来を予測することである。サッカーの選手を例にとれば、プレイヤーはチーム全体の動きを、チームの中にながら観察している。そして自分のポジションやボールの出し方などを決めていく。しかしチーム全体において、自分のプレーが最適な行動かどうかを正確に判断することはできないまま、直感的に判断してプレーする。その能力に優れているのが、日本代表でいえば海外で活躍している中田英寿や小野伸二である。

話をサッカーから教育に戻すならば、自明とされている教育の現実、および教育学の理論を新ためて問い直し、そしてその背後に隠されている前提を明らかにするということである。教育の現実や教育学理論に安住しているなかで、当たり前すぎて問うことすらないものを見つけ、それを外部からではなく内部において観察するのは難しい作業にちがいない。しかしそれを遂行することが、今井氏によればメディアのメカニズムを明らかにすることであり、また教育思想(史)研究の神髄なのかもしれない。

それと同時に、今井氏の論文を読んでいて感じたことがある。勝田守一氏の文章を読んでいくと、逆説が連続的に続きながら議論が深まっていくという、弁証法的展開を味わうことができる。また唯物論学者である戸坂潤が書いた文章を読むと、彼の思考の流れに引き寄せられるかのようになり、読んでいる

自分の頭の中で論理が明晰になっていくという機会に出くわすことがある。今井氏の文章には、彼らとは違った独特な雰囲気がある。それについてうまく表現することができないが、その点でも本書を読むことは興味深い体験であった。

具体的に読んでいて参考になったのは、「ポストモダン」の系譜を整理したII部である。フーコー、ルーマン、ハーバーマス、リオタールなど、「ポストモダン」の流れをくむ彼らの著書に、誰もが一度は目を通したことがあるだろう。私もその1人であるが、彼らが「ポストモダン」と呼ばれる流れの中でどのような位置づけにあるのか、それを理解するのは容易ではない。その点で、今井氏による「ポストモダン」の系譜の整理は、ほやけたものを鮮明にさせてくれ、その全体像をつかませてくれる。III部は、今井氏自身が自らの立場を明確にするために書かれたものであるが、読者である私自身もまた、自らの立場を考えるうえで手がかりになるものであった。

しかし「ポストモダン」の系譜が、あまりにもわかりやすく整理されているがゆえに、贅沢な疑問もまたわいてくる。本当にこんなに簡単に、整理できるのかと。それはおそらく今井氏だからこそ、それが可能であったにちがいない。残念ながら今の私には、今井氏による「ポストモダン」の整理も、また氏の立場について議論するほど、その力量がない。したがって自分にとっての全体図を描くことは、私にとって今後の課題である。

また全体を通じて気になったのは、今井氏とモレンハウアーとの関係である。モレンハウアーによって書かれた『忘れられた連関』(みすず書房、1987)を翻訳したのは、今井氏である。フランクフルト学派であるモレンハウアーは、ハーバーマスの理論を教育や教育学にとり入れたことで注目を浴びた。ハーバーマスに対する積極的評価をしているのは、III部(7章)でそのコミュニケーション論に教育学的可能性を見いだそうとする今井氏も同様である。またIV部(12章)において、美的経験の人間形成論的な意味を探求するにあたり、モレンハウアーの研究が今井氏に大きな影響をあたえているのも間違いないであろう。とするならば、今井氏について理解するには、モレンハウアーについて知らなければならないのかもしれない。しかしそれはさておき、例えばハーバーマスに対する評価において、今井氏とモレンハウアーの間にはどのような点で共通してお

り、またどのような点で違うのか。また今井氏にとって、モレンハウアーとはどのような存在であるのか、ぜひ聞いてみたい。

最後に自分の研究関心により近づけて、2点ほどコメントをしておきたい。1つは、教育学におけるメディア認識についてである。前述したように今井氏は、これまでの教育学におけるメディア認識は、「メディア利用」と「メディア批判」の2つに分類している。この分類自体はそれほど珍しいものではないけれども、そうした認識が古くはプラトンに発するという今井氏の説明は、メディアと人間形成という問題に関心をもつ私にとって、メディア認識の歴史を知ることができたという点で参考になった。また2つのメディア認識の流れに自らの研究を位置づけるならば、自分がメディア批判に近いこともわかった。それと同時にメディア批判の流れに乗るのではなく、今井氏がメディアのメカニズムを明らかにしたように、私もまたメディアのもつ環境としての働きを明らかにしようとしていることを自覚することができた。その点では、今井氏と私の研究スタンスは、その領域こそ違いはあれ、共通しているのではないかと思えた。

また電子メディア時代といわれる現在、私は直接体験と電子メディア体験の違いをていねいに吟味することによって、電子メディアと子どもたちとのかわり方を考えるという課題に取り組んでいる。それゆえに、子どもの美的経験の意味について探求したIV部12章はとくに興味深いものであった。

美的経験の意味を考えるにあたり、今井氏はまずデューイとアドルノに目を向ける。そして両者の共通点として、どちらも美的経験の核に自己との反省的關係を位置づけ、また美的経験における反省的關係があくまでも非反省的充足とのあいだで意味をもつこと、すなわち非反省的充足を支えているのは主客二元論的な経験（デューイにおける「相互浸透」、アドルノにおける「ミメシス」）をあげている。また両者のあいだには、デューイが日常経験から美的経験への連続性を主張するのに対して、アドルノは日常経験と美的経験とでは異なると指摘している点で、違いがあることを述べる。

さらに発達心理学、メルロ＝ポンティ、芸術療法、芸術教育における、子どもの美的経験に関する議論を振り返ったうえで、今井氏自身が美的経験の意味に対する思索を深めていく。そのプロセスが、本文

中に描かれている図の変化（図1→図4→図5）として現れている。今井氏の主張を簡潔に述べるならば、美的経験（のサイクル）には、知覚と感情を様式化するだけでなく、作品を経由することによって新しい自己を発見する可能性が開かれるのである。

このように美的経験の意味に対する今井氏の主張読み取ったが、正直言ってどれだけ深く理解できているのかどうかは自分自身疑わしい。例えば表現の運動と反省の運動との合流点に作品があり、また様式とゲシュタルトの合流点に様式化された知覚・感情があるということは理解できる。しかしその両者が合体すると（図5）、とたんに理解が困難になってしまう。できればこの図について、デューイとアドルノの経験に対する理解と比較しながら、より詳しい説明がほしい。

また合流点に存在する作品（自己）、様式化され知覚・感情という捉え方は、和辻哲郎の「間柄」という概念を彷彿させた。またメディアとはもともと「中間にあって作用するもの」という意味をもつことから考えると、「間柄」とメディアという2つの概念には、比較的近い意味があるのかもしれない。そのようなこともまた、今井氏が書かれた図を眺めていて、思い浮かんできた。それが自分の研究にどのように結びつくのか、今はわからないが、何かおもしろい方向に研究を進めてくれそうな予感がしている。

おわりに

以上が、今井氏によって書かれた本に対する私のコメントである。今井氏の主張をどれだけ正確に読み取ることができたのか、またこれが書評というにふさわしいものなのか、不安ではあるが、その点はお許し願いたい。最後になるが、これを機会に、今後も引き続き、ドイツの教育思想を守備範囲としながらも、日本の教育に対する今井氏の鋭い分析を期待したい。

（東京大学出版会 2004年6月発行 定価5250円）